

答えはすべて解答らんに入れない。

一 次の詩「川」とその詩を受けて書かれた文章「流れる」を読んで、後の問いに答えなさい。

谷川俊太郎・長谷川宏『魂のみなもとへ——詩と哲学のデュオ』

- 問一 **A**川はどうして笑っているの／太陽が川をくすぐるからよ」について、ここからどのような川の情景が思い浮かびますか、答えなさい。
- 問二 詩の中で、なぜ、海を母さんにたとえているのだと思いますか。「流れる」の文章をふまえて説明しなさい。
- 問三 **B**「時の流れ」には人間の初々しい生命力が封じこめられている」とは、どういうことですか。説明しなさい。
- 問四 ①ビレイ ②カントン ③ヨウイを正しい漢字に直しなさい。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

* 千恵は小学校五年生。千恵の進学問題をきつかけとして、父と母の仲はぎくしゃくしている。そんな中、千恵は深川に住む祖父エンジのもとで夏休みを過ごすよう父から言われた。エンジは大工だった。近所にはエンジと同年のシゲさんがいる。

著作権上の都合により文章の掲載はできません

* 散歩道はたいいてい同じだ。小さな家が並ぶ路地を歩いて、倉庫の門で曲がる。真つ直ぐ進むと、大きなビルの前を通る。千恵はそこで、いつも恥ずかしくなる。ビルを出たり入ったりしているのは、ちゃんとした格好の人ばかりだからだ。エンジはダボシャツにステテコ。平気で歩いていく。そこを過ぎると、また永代通りになる。いろんな人が多くなるので、ほつとする。それに、エンジと似たような格好をしている人が、ひとりやふたりはいた。だらしないく伸びたランニングシャツに、パジャマズボンとか。手拭いをかぶったお婆さんとか。そうして永代橋にたどり着くころには、もう日は沈みかかっている。

永代橋は大きくて、きれいだ。ぐうんと延びているのがいいと思う。まるで天に昇る道みたい。

だけどエンジはいつも永代橋を渡るうとせず、その手前にある広場のベンチに腰掛け、寄ってきた鳩にパン屑なんかあげたりするばかり。千恵はベンチの上に立つて、背伸びしつ、永代橋を眺める。岸の向こうにはビルがいくつも建っていた。さっき前を通ったビルよりも、ずっと大きくて、もっと立派だ。

隅田川は広い。船がいつぱい、行ったり来たりしている。対岸にあるビルは、日が暮れてくると、窓がきらきら光りはじめ、さらに立派に見えた。まるで別世界みたいだ。あそこには絶対、エンジのように、ダボシャツとステテコで歩く人はいないだろう。

そう、とても、とても、遠い。隅田川の幅よりも遠い。

「帰るぞ」

やがてエンジは言う。

「橋は渡らないの」

千恵は尋ねる。

橋の方をみたエンジは、目を細めた。夕日がまぶしいんだろうか。「面倒だからな」

くるりと背を返し、エンジは自分の町に、深川に戻っていく。

それが毎日のことだった。

いくらか涼しくなった夕暮れ時とはいえ、真夏の町を長いあいだ歩くと、背中に汗が滲んだ。シャツが背中に張り付いて気持ち悪い。歩きながら、千恵はたまに、後ろを振り返った。永代橋を、その向こうにある立派なビルを眺めた。

なぜ見捨てられたような気がするんだろう……やけに寂しくなるんだらう……。

* 千恵はシゲさんの孫の美紀ちゃんと知り合い、他の子たちとも遊んだ。

* 「わたし、大縄跳びもした。最初は全然駄目だったけど、最後はうまく跳べるようになったよ。あとエンジに家を建ててもらったって子がいた。いつぱいだっただよ。わたし、ちよつとびつくりした」

「まあ、この辺りじゃ、ずいぶん建てたからな。古くなったんで、今は半分くらい壊されちまったが」

「家つてどれくらいもつ」

「ちゃんと手入れしてりや、いくらでも、もつさ」

「ふうん」

「ただまあ、みんな、手入れなんかやんねえんだ。それにコンクリで基礎やるようになってからは駄目だな。コンクリはそんなに長くもたねえ。四、五十年くらいだ。あれでけつこう湿気に弱いのだ。ヒビが入ると、中

の鉄筋が腐ちまう」

千恵が世田谷で住むマンションは、もちろんコンクリだった。

「わたしの家……お父さんの買ったマンションも長くもたないの」

「ちゃんと修繕してれば大丈夫だ」

「してるかな」

A「おまえのオヤジが選んだところなら大丈夫だろうよ。あいつは聡いんだ。おかしいものは選ばねえさ」

しまった、と思った。お父さんのことになると、エンジは不機嫌になる。ああ、ちよつと違うかな。困ったっていうか、面倒っていうか、悲しそうですね。どうしていいかわからない感じ。

それから先は、いつものように、黙ったまま、ごはんを食べた。

* 千恵は深川を歩き回り、徐々に町のことを知り、好きになつていった。また、美紀ちゃんに教えてもらって、二重跳びもできるようになった。こんな日が続くと思っていたが……

お父さんがやつてきたのは、八月に入つて、しばらくしたころだった。「あれ、どうしたの」

驚く千恵に、まあなと言つて、お父さんはエンジの家を上がり込んだ。遠慮するふうもなく襖を何枚か開け、居間にいるエンジと顔を合わせた。(中略)

お父さんはエンジのそばに行つた。胡坐のかき方も、背中の丸まり①グアイも、眉毛と同じように、エンジそのままだった。お父さんじゃなくて、年寄りのエンジに、若いエンジが向かい合っているみたいだった。

「千恵を引き取りにきた」

「そうか」

「オヤジには面倒かけたよ」

団扇が揺れている。エンジと、若いエンジが、わたしをどうするか話している。千恵は思う。なにかも勝手に決めようとしている。

「今日、連れてくよ」

「ん」

「本当に面倒かけた」

エンジはゆっくり顔を上げた。目を細めた。いや、と言った。「さして面倒じゃなかったがな」

千恵は二階へ駆け上がった。家が古いので、階段がギイギイと鳴いた。いや泣いた。来たばかりのころは——ほんの数週間前のことだけ——なにかも嫌だった。古い家の匂いとか、薄暗い階段とか、エンジの②「夕」③「夕」④「夕」⑤「夕」⑥「夕」⑦「夕」⑧「夕」⑨「夕」⑩「夕」⑪「夕」⑫「夕」⑬「夕」⑭「夕」⑮「夕」⑯「夕」⑰「夕」⑱「夕」⑲「夕」⑳「夕」㉑「夕」㉒「夕」㉓「夕」㉔「夕」㉕「夕」㉖「夕」㉗「夕」㉘「夕」㉙「夕」㉚「夕」㉛「夕」㉜「夕」㉝「夕」㉞「夕」㉟「夕」㊱「夕」㊲「夕」㊳「夕」㊴「夕」㊵「夕」㊶「夕」㊷「夕」㊸「夕」㊹「夕」㊺「夕」㊻「夕」㊼「夕」㊽「夕」㊾「夕」㊿「夕」

ただ今今は、ここが自分の家みたいだった。

階段を上りきると、右と左に、それぞれ襖がある。ドアじゃない。右側にある襖を開けた。手をかけるところは擦り切れている。開けると千恵の部屋だった。(中略)

ふう——。ふう——。

それが自分の息だと気付いたのは、しばらくたつてからだった。心の中で、なにかが暴れまわっていた。いろんなものが零れそうだった。だけど泣くものかと思った。こんなことで、わたしは泣いたりなんかしない。ほんのちよつと、夏休みのあいだ、お祖父ちゃんちに来てただけだ。そして、これから帰る。ちよつとおかしなことじゃない。夏休みが終わったら、友達に言おう。お祖父ちゃんちに行つたの、③「アング」④「アング」⑤「アング」⑥「アング」⑦「アング」⑧「アング」⑨「アング」⑩「アング」⑪「アング」⑫「アング」⑬「アング」⑭「アング」⑮「アング」⑯「アング」⑰「アング」⑱「アング」⑲「アング」⑳「アング」㉑「アング」㉒「アング」㉓「アング」㉔「アング」㉕「アング」㉖「アング」㉗「アング」㉘「アング」㉙「アング」㉚「アング」㉛「アング」㉜「アング」㉝「アング」㉞「アング」㉟「アング」㊱「アング」㊲「アング」㊳「アング」㊴「アング」㊵「アング」㊶「アング」㊷「アング」㊸「アング」㊹「アング」㊺「アング」㊻「アング」㊼「アング」㊽「アング」㊾「アング」㊿「アング」

ふう——。ふう——。

気持ち収まらないまま、そんな息ばかりが漏れた。そのうち、階段がギイギイと音を立てた。誰かが上がってくるんだ。大丈夫だとはわかつてたけど、いちおう頼に手をやった。ちゃんと乾いていた。

やつて来たのはお父さんだった。

「千恵、ここにいたのか」

「わたしの部屋だから」

「それしか言えない」

「ここだから」

お父さんは一緒に来なさいと言つて、部屋を出た。襖を開け、向かいの部屋に入った。しばらくたつてから続くと、お父さんは部屋の真ん中に立ち、室内を見まわしていた。

「ここがお父さんの部屋だったんだ。なにも変わってないんだな」

「ふうん」(中略)

「お父さんはね、この家がすごく嫌いだった。お父さんのお父さん、おまえのお祖父ちゃんのこと本心に嫌いだった。どうして、こんな家に生まれてしまったんだらうって、考えてばかりいたよ」

部屋の真ん中で、お父さんは言った。

「とにかく雑で、自分勝手に、学がなくて、テレビに出てくるスマートなお父さんとはまったく違っていた。そんな家の人間であることが嫌で仕方なかった。家を出ることばかり、考えて過ごしてたな」

お父さんは、勝手に話している。だから必死に勉強して、いい学校に入つて、就職した。下宿に移ったと

きは、心底から、ほつとした。なのに、この部屋は、そっくり残ってるんだ。ここにいて、お父さん、なんだか辛いよ」

日が傾いたのか、突然、窓から明かりが差し込んできた。その細い光の筋の中で、埃が舞っていた。

千恵はうずうずした。お父さんの言うことはわかる気もするけど、ちよつともわからない気もした。たぶん、お父さんは今、いろいろ考えてるんだらう。でも、それはお父さん自身のことだった。千恵のことじゃなかった。

「わたし、ここにいて」

言葉を放つてから、千恵は自分でもびつくりした。

「ずっとここにいて」

「どうして」

お父さんも意外だったみたいで、口をぽかんと開けている。

千恵は感情のまま訴えた。

「わたしもお父さんが嫌いだよ。あんな家、戻りたくもないよ。見栄を張つて、高いマンションなんか買っちゃつてさ。お金を返すのが大変なんですよ。前にお父さんとお母さんが話してるの聞いたもん。それで夜遅くまで働いて、お母さんは近所のひととよくやるのに高いランチとか食べに行つたりして、そんなのみんなみともないよ。ねえ、お父さんはそれで楽しいの。せつかく買った家なのに、日曜しかゆっくりできないじゃない。わたしは楽しくないよ。昔のお父さんと一緒にだよ。早くあそこを出たいよ。わたしのことを勝手に決めようとしてるお父さんもお母さんも大嫌いだよ」

ふう——。ふう——。

「わたし、ここがいい。これから、ここで暮らす。友達もできたんだよ。大縄跳びだつて、二重跳びだつて、教えてもらえる。お父さんやお母さんというより、ずっと楽しいよ。あのね、橋を渡つてると、風が吹いてくる。水の匂いがあるし、たまに海の匂いもある。橋から叫ぶと、向こうの橋にいる友達に声が届くんだよ。魚が泳いでるのだって見える。世田谷の家に戻つたつて、エレベーターで上がった下がり下がりするだけじゃない。わたしはここがいい。エンジと一緒に住む」

ギイギイと音が聞こえるのには、なんとなく気付いていた。誰かが階段を上ってきたんだ。お父さんもそつちを気にする素振りを見せた。

だけど今は、ふたりとも、それどころじゃなかった。

直後、轟音が家中に響いた。なにかが階段を転げ落ちたのだ。

なにかつて——？

先に動いたのはお父さんだった。ものすごく早かった。襖を開け、階段を覗き込んだ。

「オヤジ！」

叫んだ。

続いて千恵が覗き込むと、エンジが階段の下にうずくまっていた。

千恵も叫んだ。

「エンジ！ ねえ！ エンジ！」

いろいろあった。全部は覚えてられなかった。④「キウキウ」⑤「キウキウ」⑥「キウキウ」⑦「キウキウ」⑧「キウキウ」⑨「キウキウ」⑩「キウキウ」⑪「キウキウ」⑫「キウキウ」⑬「キウキウ」⑭「キウキウ」⑮「キウキウ」⑯「キウキウ」⑰「キウキウ」⑱「キウキウ」⑲「キウキウ」⑳「キウキウ」㉑「キウキウ」㉒「キウキウ」㉓「キウキウ」㉔「キウキウ」㉕「キウキウ」㉖「キウキウ」㉗「キウキウ」㉘「キウキウ」㉙「キウキウ」㉚「キウキウ」㉛「キウキウ」㉜「キウキウ」㉝「キウキウ」㉞「キウキウ」㉟「キウキウ」㊱「キウキウ」㊲「キウキウ」㊳「キウキウ」㊴「キウキウ」㊵「キウキウ」㊶「キウキウ」㊷「キウキウ」㊸「キウキウ」㊹「キウキウ」㊺「キウキウ」㊻「キウキウ」㊼「キウキウ」㊽「キウキウ」㊾「キウキウ」㊿「キウキウ」

「骨に異常はないですね」

レントゲンを見ながら、お医者さんは言った。お父さんは息を吐いた。本当に、本当に、たくさん息だった。

「じゃあ大丈夫なんですか」

「大きな怪我ではないのは確かです。ただ、お年がお年ですから、カンタではないかもしれない。お父さまはおひとりでお住まいですか」

「ええ、わたしは離れて住んでまして」

お医者さんとお父さんがそんな話をしている最中、後ろのベッドに寝転がっていたエンジが手招きした。

迷いつつ、千恵はそちらに向かった。

「道具箱を片付けておいてくれ」

「え……」

「あれがあると、ばれちゃうかもしれないから。階段の下に転がってる」

「道具箱、なにに使ったの」

「投げ落としした」

「なんで」

「息子と孫娘がああだこうだ言つてんのは好きじゃねえ。本当のことをいうと、俺はなんともねえんだ」

エンジは、お父さんとお医者さんの姿を横目で確認してから、痛い痛みと訴えていた右膝を曲げ、足を浮かせてみせた。足は軽々と動いた。そしてエンジは笑った。(B)「——という顔だった」

ようやく、からくりが気付いた。階段から落ちたのはエンジじゃなかったんだ。階段を何段か上ったあと、道具箱を放り投げた。それから慌ててエンジは階段の下まで行つて、うずくまった。よくもまあ、そこまで頭がまわったものだ。呆れつつ、感心した。少しだけ千恵も笑ってしまった。なぜか泣くような顔になって

しまつたけど。エンジは、口に人差し指を当てた。黙つてろつてことだ。千恵は頑張つて、笑い声を抑えた。

やがてお母さんがやつてきた。家族全員が集まつた。まるでエンジが今にも死ぬみたいだった。エンジはそんな厳肅な雰囲気の中、全員を呼び寄せた。

「俺になにかあつたら、あの家は売つてくれ」

「怖いこと言わないでください」

お母さんの顔は真つ青で、声はうわづつていた。

「あそこは二十七坪ある。狭いが、角地だから、そこそこ値がつくだろう。千恵の学費くらいは出るはずだ。千恵の好きなところに行かせてやれ」

エンジ、と千恵は叫びたかつた。学費なんてどうでもいいよ。あんまり会えないし、仲がいいのかどうかかわからないけど、エンジがこの町でずっと生きていくくれる方がいいよ。だつて、ここはエンジの町なんだよ。エンジが死んだおかげで私立中学校に行けるんなら、わたしは行かなくていいよ。どんなに強く思つても、言葉は出てこなかつた。悔しくて、千恵は唇を噛んだ。そのうち鉄錆臭い味が広がった。様子に気付いたのはお母さんだった。

「どうしたの、千恵。唇を切つてるわ」

「なんでもない」（中略）

「ほら、ハンカチで血を拭いて」

「どうでもいい！」

大声を出したのは、お父さんだった。

「血なんかどうでもいい！」

「だけど——」

「血なんか放つておけばとまる！今はそんなことを話するときじゃないだろ——」

「でも——」

「うるさい！黙つてろ！」

お父さんがそういう乱暴な言葉を使うのは初めて聞いた。お母さんはびつくりしてゐた。千恵も同じだった。お父さんは明らかに怒つていた。お母さんと喧嘩したときは比べられないくらいだった。

オヤジ、とお父さんは言つた。

「下らないことを気にすんな。うちの家計が面倒なのは確かだけど、俺がなんとかするんだよ。あんただって、そんな覚悟で俺やオフロを養つてきたんだろ？千恵のこと、家のことも、俺がなんとかする。あれは俺の家なんだ」

エンジは目を丸くしていたけど、そのうち真面目な顔になった。

「できるのか」

「当たり前だ。頑張るさ」

「C」そうか、とエンジは言つた。いつもの、団扇を振っているときの調子だつた。変なことを言つてゐるかつたな」

「大丈夫ですか。歩けますか」

「氣遣つてくれるお医者さんに悪いなと思つた。立ち上がったエンジは、実にわざとらしく膝を押さえたけど、それはすべて⑤エンジなのだ。『まあ、なんとか。ただ、一ヶ月ばかり、誰かがいてくれると、助かるには助かりますな。ちよいとしたことを頼める相手が。いや大人じやなくていいんだ。そんなたいそうなことは頼まないでね』結局、千恵が付きそうこになつた。エンジのグアイがよくなるまでの話だつた。そう、一ヶ月ばかり。ちょうど夏休みが終わるまでのあいだ。」

「うまくやつただろう」

家に帰ると、エンジは笑つた。

千恵も笑つた。

「完璧だよ」

買ったばかりのチェリオ（注：ジュースの名前）を、ふたりで飲んだ。とても甘かつた。

*

一ヶ月の深川生活は楽しかつた。千恵はすべての川や橋を覚え、みんなと大縄跳びをした。エンジは、塀より自分の方が先に死んでしまうから直さないのだと言つていた板塀を直した。やがて千恵が世田谷に帰る日になつた。

*

「さて行くか」

そう言つたエンジは、いつものダボシャツとステテコではなく、透かしの入った服と、濃紺のズボンをはいていた。なんと足もとは黒の革靴だ。エンジがそんな格好をしているのは、初めて見た。千恵はびつくりしてしまつた。

「え、なんで」

千恵は尋ねたけど、見当違いの言葉が返つてきた。

「いや、あるいは、ばつちりだつたのか。」

「永代橋を渡りたいんだろ？」

「あ、うん」

「一回くらい渡つておいても損はないな。ありや立派なもんだ。橋のむこうも、どうせ同じ地下鉄だし」

「エンジも渡るの」

「そうさな」

エンジは、しばらくのあいだ、考える振りをした。

その気持ちは明らかなのだが。

「まあ渡ろうか」

「向こう岸に行つたことあるの」

「そりやあるさ」

ぐずぐずしている千恵を促したのは、エンジの方だった。

「忘れ物はないか」

「うん」

「じゃあ行こう」

エンジはいつもの散歩道を進んだ。永代通りを真つ直ぐ歩いた方が早いのに。裏道を行き、倉庫の門を曲がつた。自然と千恵の足取りは遅くなつた。少し歩くごとに、エンジは待つていてくれた。

「いつでも来られる」

エンジは言つた。

「シゲが調べてくれたんだ」

「え、なにを」

「清澄白河駅なら一本だ」

千恵の住む世田谷と、エンジの住む深川は、直通電車がある。地上線と地下鉄だけど、繋がっているのだ。

「そうだね」

なぜ、そのとき、胸が痛くなつたんだろうか。

「すぐだよ」

やがて永代橋に着いた。太陽はビルの向こうに沈んで、その輪郭だけが光つていた。

橋の手前で、エンジは立ち止まつた。

「行こうか」

「うん」

「渡るぞ」

なかなか歩きださない。しかし最初の一步を踏み出すと、あとはスムーズだつた。いつしか、千恵はエンジと手を繋いでいた。エンジの手は大きく、こつこつしていた。硬かつた。

「手、硬い」

そういうと、エンジは笑つた。誇らしげだつた。

「職人だから」

空いている右手で、千恵は永代橋の欄干に触つてみた。たくさんのでこぼこがあつて——リベットというのだとエンジが教えてくれた——それに触れるたび、頭ではなく、手のひらが膨らみを記憶していつた。この感触は、ずっと残る。そう思つた。頭で覚えたことは忘れてしまふかもしれないけど、体で覚えたことは決して忘れないだろう。

「気が向いたら来い」

「うん」

「気が向かなかつたら来なくていい」

「うん」

エンジは少し、躊躇つた。言葉が残つてるのがわかつた。

迷つた末、千恵は尋ねた。

「なに」

エンジはしばらく答えず、ただ橋を渡つた。永代橋は、ぐうんと天に向かつて延びていた。とてもきれいだと思つた。どこまでもどこまでも登つていけそう。向こう岸のビルは、ちらほらと光を灯しはじめていた。まるでキャンデルのようだつた。これから、わたしはあそこに行くのだ。

「俺はずっとここにいます」

エンジは言つた。

千恵は頷いた。

「うん」

どうしたつて他の言葉は出てこなかつた。それでいいという氣もした。エンジと手を繋いだまま、千恵は永代橋を渡つた。

ビルがぴかぴか光つていた。

風が吹いた。

海の匂いがした。

千恵はエンジの手を強く、強く、握りしめた。

【橋本紡「永代橋」『橋をめぐる いくつかのきみへ、いくつかのぼくへ』（文藝春秋刊）所収】より

問一 (B) にあてはまる言葉を次のア～エから選び記号で答えなさい。

ア あつぱれ

ウ これはしたり エ してやつたり

問二 (C) とうか、とエンジは言つてゐるかつたな」とありますが、

(1) 「変なこと」の具体的な内容をわかりやすくまとめなさい。

(2) また、(A) おまえのおやじがくわからない感じ」の部分とくらべて、(C) では、エンジの、お父さんに対する気持ちはどのようになつてしまつたか。句読点をふくむ二百字前後で説明しなさい。

問三 エンジははじめのころ、永代橋を渡ろうとしませんでした。最後の場面では千恵と一緒に渡ります。なぜエンジは、渡ろうという氣持になつたのですか。エンジにとつて永代橋の向こうはどんなところであるかをふまえて説明しなさい。

問四 ①グアイ ②タイド ③アングイ ④キユキユシヤ

⑤エンジを正しい漢字に直しなさい。

⑤エンジを正しい漢字に直しなさい。

⑤エンジを正しい漢字に直しなさい。

⑤エンジを正しい漢字に直しなさい。